
Crimson-Reason.

霧.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r i m s o n - R e a s o n .

【Nコード】

N 3 4 0 8 B A

【作者名】

霧 .

【あらすじ】

一人の少女が死んだ。高校生の少女だった。理由も犯人も不明。ただ、分かるのは「少女が死んだこと」それだけだった。警察も、殆ど何もできないまま、全てが思い出しに、日常になるのか。そう思った矢先に今度は一人の親友が消えた。理由も分からずに、ただ「行ってくる」それだけを残して。それから半年経った頃、浅村瑞樹とレナード・アウリオン、そして、死んだ高宮唯の喜悲劇が始まった。

葬式（前書き）

初めまして、そしておはようございます、こんにちは、こんばんは。
霧・です。

この小説は、2011年の夏休みに、無制限の小説コンクールに学校から提出する為に書いていたものです。 実際は、~~メ~~切前に完成せず、提出できませんでした。投稿日現在でも完成していませんので、悪しからず。

2012年の夏にも提出できると思いますが、それまで、頭の中の構想が持つか不安なので、こちらにアップします。

私自身としては、初の現代ファンタジー&サスペンス（？）ものなので、不安ですが、宜しくお願い致します。 ご質問・ご感想・蔑み（↑）受け付けております。

それでは。 by 霧・@夢音魁裏

葬式

残冬。まだ、桜や梅が、その花の蕾を枝に付ける前の、木に空から降り積もった雪が溶けきらない頃、一人の少女が、暗い箱の中で深い眠りについた。

彼女の周りには、一人一本ずつの白い花を添え、彼女を美しく飾り、彼女に祈りを捧げて、その場から去っていく。まるで、全て白い花のみで造られた花畑から、白を強調させる為に間引かれる黒い花の様だ。そしてやがて、黒い花は、二輪ふたりの若い花男だけになった。

二人は、彼女を囲むように立つと、それぞれ渡された白い花を、彼女の周りに添えていく。茶髪に近い黒髪の少年は、彼女の左手の近くに、銀髪の少年は、右手の近くに花を添える。二人は添えた花から手を離すと、静かに祈りをささげ、その場から去っていった。

扉が、どこか古めかしい音を響かせながら時間が止まった様に、しかし、確実に閉じていく。扉が完全に閉まった、その数十秒後、部屋から、小さく燃えさかる音が聞こえた。

その音を、少し離れた所で聞いていた二人は、焚火の音とも、ガスコンロとも、花火とも違う、飛行機に乗った時に聞こえる耳鳴りのような音を、身をすくめながら聞いていた。

ふと、銀髪の少年が顔を上げると、少し震えた声で言った。

「なあ、瑞樹。浅村あさむらみずき 瑞樹。何で……アイツは燃やされる？」

浅村瑞樹と呼ばれた茶髪に近い黒髪の少年は、両目を閉じて、答えを述べる。

「……何度、言わせるんだよ、レナード。レナード・アウリオン。彼女は……高宮たかみやゆい 唯は死んだんだ。体を数ヶ所、刃物で刺されて。

お前の故郷じゃ、土葬がセオリーなんだろうけど、この国じゃ、火葬がセオリーなんだ。燃やされるのは……仕方ないよ」

「違う！」

瑞樹の答えに、レナード・アウリオンと呼ばれた銀髪の少年は、その答えを、力任せな声で否定した。

彼は、ぶら下がったままの右手を、瞳を覆い隠す様に顔に置く。

「俺が聞いているのは、何で、唯が殺されなきゃ……死ななきゃならなかったか。だ！くだらない後日談なんか、ハナから考えてないからな……！」

そう言い放って彼は顔を潰す勢いで右手を強くしめる。

瑞樹の位置からでは、彼の表情はよく見えない。

だが、手の平からあぶれた、口の端と、指の隙間から見えるわずかな目の端しか見えないが、それだけでも、よく判る。

彼女を殺した犯人への怒りや憎しみ。そして、高宮唯という、大切な人を失った、悲しみと絶望。それら「負」の感情が、彼の中で渦巻いているのが、表情からも、彼の周りに張られた空気からも、それが痛いほどに伝わってくるのが分かった。しかし、だからといって、彼の問いに正確に答えてくれる人間など、この式場には居ない。いや、日本中、世界中を探しても、彼女を殺した張本人以外は、誰も答えられないのだ。人は仮説や予想を立てる事はできても、それを立証できる人は、僅かしか居ないのだから。彼は、それが理解できているからこそ、こんな複雑な感情が滲み出ているのだ。

ふと、彼は右手を顔から離すと、

「なあ、瑞樹。俺達の世界は、変わるんだろうか」

と、言った。瑞樹は一瞬、目を見開くと、落ち着かせるように言った。

「そりゃ、少なからずは、変わるだろう。だけど、時間が経てば、いずれ忘れて、日常に変わるんだ。違うか？」

その言葉はまるで、自分自身を慰め、落ち着かせる言葉にも聞こえるが、実際、そうなのだろう。

彼もまた、大切な人を失った悲しみに、苛まれているのだ。そんな彼の答えにレナードは、

「……そうだな」

ただ短く、まるで自分自身を納得させるかのように、静かにそう答えた。

その、翌日のことである。

銀髪の少年、レナード・アウリオンが、行方不明となったのは。

居残り

その、翌日のことである。

銀髪の少年、レナード・アウリオンが、行方不明となったのは。

とある公立高校のとある教室で、一人の少年が窓に寄りかかりながら、携帯電話の画面を見ていた。カチコチと、黒板の上にある時計の音と重なる様に、携帯電話の操作音―とはいっても、マナーモードにされているので、実際はボタンを押す音だが―が聞こえる。

時計の針は、五時五十五分という、なんとも微妙な数字を指している。

彼は少し小さめの、かつ、思いつめた、溜息を吐くと、

「今日もメールなし…か」

と言って、携帯電話を閉じる。

時刻は少し経ち、五十六分になっていた。彼はそれを見て、少し慌てた雰囲気を出していた。

「あれから半年、季節も夏。最終下校時刻もそれなりにあるけど、もう、数分前なんですけど、もうすぐで校門が閉まるんですけど先生…！」

彼は、自らの目の前にある、幾つかに分けて平積みされた、プリントの山を見た。

プリントとは言っても、中に書かれている内容は多種多様である。一つの内容ごとに分かれており、更に、数えないで見ただけでも、二十五枚前後はあるので、後日、生徒に配る為のものだろう。彼は担任から、教室に誰か一人でも居ないと、他の先生に鍵を閉められるからと、担任が戻ってくるまでの留守番をしていたのだが、如何言う訳か、下校時間寸前まで、担任、いや、先生、部活動の生徒も誰一人として、この教室の前の廊下を通らなかったのだ。

普通ならば、こんな事はありません。

彼が窓枠に寄りかかりながら半ば諦めたように、深いため息を吐いた。すると、その数秒後、いつもの聞きなれた音の連なりが黒板の上の放送機器から聞こえてくる。

こういうのは普段、昼間など、人が多い時は分からないが、限られた空間に一人になると、音が、空間で反響し、歩き、走り回っているのを、人は体全体で感じる事ができる。

彼は音、チャイムが鳴り終わるのを聞いていると、教室のドアが開く音が聞こえ、そちらに顔を向け、

「佐々木先生」

と、来訪者に言った。佐々木と呼ばれた瑞樹の担任は苦い顔をしながら、教室に入った。

「いやー、ごめんな、浅村。今日は職員玄関から出るといい。取り敢えず、ありがとうな。」

彼はそう言って、机の上に広がっているプリントを順に重ねていきながら、抱えていく。

一つのプリントの束の量は大きなもの、それをいくつも抱えるのは、かなり大変である。流石に手伝おうと瑞樹はプリントへ手を伸ばしたが、佐々木は「職員室まで殆ど直線だから大丈夫」と、断った。

瑞樹はプリントから手を離すと、一礼して教室を出ようと、ドアへと向かったが、ドアを開く為の凹んだ取っ手に手を掛けた所で、佐々木は何かを思い出したような口調で言った。

「そう言えば浅村。ここに帰ってくる前に、警察から連絡があったんだ」

「連絡…？それをなぜ僕に？」

瑞樹がそう聞くと、佐々木は少し渋った顔を見せ「言ってもいいものなのか」と言っているような雰囲気で考えた。

そして少し経つと、言った方がいいと判断し、口を開いた。

「お前のことだから、あらかた予想はついていると思うが…、昨日の午後7時前後に、この学校付近にある公園で、レナードらしき人物の目撃情報があったらしいんだ」

瞬間、彼の時が止まる音が聞こえた気がした。

「レナード」他の人に半年振りに言われた名前は、彼の体を止めた。暫くの間、静寂が訪れる。

その静寂を破ったのは、瑞樹だった。

「レ…レナードが…レナード・アウリオンが、見つかったんですか…？」

目を見開いた中で、やっと言えた言葉は、それだけだった。佐々木はゆっくりと、まるで瑞樹を落ち着かせるように頷く。

「そう…ですか…。ありがとうございます。さようなら、先生」

瑞樹はそう言うと、手を離してしまったドアの取っ手に手を掛け直し、開くと、走って昇降口へ向かった。佐々木は何か呟きたそうに考えると、その教室を去った。

教室を閉める為の見回りの先生が来たのは、そのすぐ後である。

疾走下校

瑞樹は気付けば、昇降口についていた。

昇降口で靴を履き替えると、マナー違反だがそのまま職員玄関へと向かい、外に出た。

目指す場所は、先程、担任の佐々木が言っていた公園。

体力や足などの身体のことなど気にせず、瑞樹は全力で道を駆け抜ける。

校門を出てすぐ近くにある長い坂を駆け上り、すぐ右に曲がって今度は急な坂を下り、道なりに進んで分かれ道で右に曲がり、進む。今度は左右前の分かれ道を同じく右に曲がり、またすぐある左右前の三つの分かれ道を先程とは逆の左に行き、急な坂道を今までよりスピードを上げて駆け上る。

何も考えず、夢中で、ただ走る。

そうして坂を上りきり、差かとの境目にある白い鉄柵―ポールのよなものの―に手を掛けて、激しい息切れを整えると、ある程度、伸びをする。

伸びをやめた瞬間、今までの疲れが、ドツと、背中に乗る感触が瑞樹を襲った。彼はそれに、フウと息を大きく吐くと、眼前に広がる風景を見た。

木、一面に木や落ちた葉などの緑が広がっている。まるで、道路を挟んで坂道と道路の境目の延長線上に並んでいる住宅街と世界を隔離している様な、科学は一切受け付けない雰囲気、そこにはあった。

それが、ここの公園の名前だった。

瑞樹は坂道のすぐ近くにある公園の入り口に行くと、落ちた葉であまり見えなくなった階段を下り、直ぐ傍にある段差を跳び越え、その前方左側にある木でできた手すり付きの階段をゆつくりと下りる。その先にある段差を跳び下りると、瑞樹は広い場所に出た。彼は見通しの良いその場所を見回す。

すると、広場に設置されたテーブルの方に歩みを進め、やがてテーブルから小幅二十〜三十歩辺りで止まった。
そして、先程から、このテーブルの上にあおむけで寝ている少年に声を掛けた。

「久しぶりだな。レナード」

再会

「久しぶりだな、レナード」

「……………」

レナードと呼ばれた少年は体を起こすと、目の前に立っている瑞樹に含みのある微笑みを見せ、

「ああ、久しぶりだな、瑞樹」

そう、言った。

彼はテーブルにちゃんと座り直し、足を組むと、軽く伸びをした。

「それにしても、早かったな。てつきり、時間ピッタリに着くかと思っただが、まだ七時まで二十分以上もあるじゃねえか」

レナードは右腕にある時計を見ながら、まるで「変わってないな」と言っている様な顔で言った。瑞樹はその問いに、腕を組んで「バカな質問しないでくれよ」と言う顔で、

「それで時間ピッタリに来たり、十分前に来ても『遅かったな。お前ならもつと早く来るかと思っただぜ』とか言うだろ、絶対」と、半ば呆れ口調で言った。

レナードはそれにハーツと大きい溜息を吐くと、右手で頭をガシガシと掻き始めた。凶星だったようだ。

瑞樹はその行為にプツと笑い始めると、レナードは少し頭にきたのか、少しイラついた口調で笑った理由を聞いた。

「ハハハハ…！いや、ごめんごめん。お前があまりにも変わってないから、つい…！」

そう言っつて、彼はまた笑いだす。

「人は半年じゃそう変わらねえだろ…！」

現にお前も半年前と変わってねえし。特に、そのツボが変でそして浅い所とかな！」

レナードは半ば呆れた様な大声で、瑞樹を指差ししていった。そして、遂にはつられて笑いだしてしまった。レナードもツボは浅いらしい。

暫くして、笑いが収まると、二人は互いの顔を見た。そして、互いに無表情になる。

先に口を開いたのは、瑞樹だった。

「『人は半年じゃ、そう変わらない』ならお前の『心』も、半年前と変わってない。で……いいんだな？」

「当たり前だろ」

レナードは瑞樹の問いに間髪いれずに答えると、座っていたテーブルから立ち上がり、その中央に一番近い位置に立つと、彼はこれが自分の世界だ。とても言う様に、瑞樹を見下ろしながら言った。

「俺は半年前から変わっていない。たとえ世界が忘れようが、俺は忘れない。

俺の中にある俺の『世界の関節』は、また、外れたままだ！」

彼はそう言つと、自分の胸に右手の親指を突き立てるようにして拳をつくり、叩いた。

瑞樹はそんな彼を見て「レナード」と小さく呟き、次の言葉につなげようとしたが、肝心のその言葉が喉につつかえて声にする事が出来なかった。

少しして、話題を変えようと瑞樹が口を開いた。

「そう言えばレナード。お前、半年も連絡しないで、一体、どこ

に行つてたんだ？」

「連絡したら、警察に居場所がバレるだろ。だから、連絡しなかった。」

それと…、俺が半年間、何をやってたかなんぞ、お前なら簡単に想像出来んだろ」

レナードはそう言いながら、テーブルの上から降りると、そのテーブルの奥にある、二人の腹の位置辺りまである鉄柵に背中を預ける様に寄りかかると、瑞樹に「こっちに来いよ」と言った。

瑞樹は言われた通りに彼の隣に立つと、組んだ腕を鉄柵の上に置き、寄りかかる様に顔を腕の上にのせた。その姿勢にしたので、体がくの字に曲がる。

「……復讐か…」

瑞樹はそう呟いて、小さく溜息を吐いた。

「止めたつて無駄だぜ。もし止めるなら、半年前に戻れよ」

「ようするに、遅い。つてことだろ。だけどレナード、どうやって、警察が見付けたもの以上は見つからない。それはお前だつて判つてるだろう!？」

瑞樹は口を切る勢いで、噛み締めた。半年前に、悲しみや絶望を味わったのは、レナードだけではないのだ。レナードは空を見上げると、口を開く。

「知つてたさ、無駄だつてことぐらいな」

その言葉に、瑞樹は勢いよく鉄柵から体を離し、レナードの方を見て、口を開いた。が、

「ならなぜ半と…」

「だが」

と、全てを言い切る前にレナードが遮った。

瑞樹は反論しようとしたが、レナードはそれを遮つて言葉を続けた。

「何もしなきゃ、それこそ何も始まらないぞ。」

実際、俺はこの半年で決定的なものを見つけたからな」

「え…！？」

レナードのその言葉に瑞樹は動揺を隠せず、思わず「見つけたって…」と聞き返した。

彼は、そんな友人を見て、ただ頷いた。

「ああ、さつきも言ったが、決定的なものをな」

「何を見つけたんだよ？」

瑞樹が驚いた表情のままそう聞くと、レナードは空を見上げたままだった顔の向きを前方に直し、言った。

「アイツの…高宮唯の死因と、唯が死の直前まで何をやらされていたのか…だ」

風が、吹いた。

まるでこの時を狙っていたかのように、風が、吹いた。

「それ、確かなのか…？」

「ああ」

「一体…何だったんだよ！」

瑞樹は、紙の束を叩きつけるように、レナードに聞いた。レナードは今にも掴みかかってきそうな彼を見ると、ふうと息を吐いた。

「落ち着け、瑞樹。大丈夫だ、すぐに教えてやる。だから…」

「だから？」

瑞樹がそう聞いて次を促すと、レナードは、彼には似合わないニッコリとした笑顔を見せた。

彼はその笑顔にゾツと背中に悪寒が走り、反射的に左手で右腕の服の袖を掴んだ。

レナードはそれを気にすることなく、その笑顔のまま言う。

「だから…、今は寝てろ」

その言葉に、瑞樹は問い返すことなく、その場に倒れた。
寝息が聞こえるので、本当に寝ているだけの様だ。

レナードは表情を笑顔から無表情に戻すと、寝ている瑞樹を見た。
彼は小さく口を開くと、

「『』すぐに」か。言うには、易しい言葉だ（シェイクスピア
ハムレット）ふくだっねあり 福田恒存訳 「第三幕 第二場」『』」

そう呟いて、その場所から去った。

再会（後書き）

ハムレットです。

この辺りから、登場人物達から、シェイクスピア作品の劇中の言葉を、連発することが多くなります。
ご注意を。

それでは。

b y 霧 .

部屋語らい

瑞樹が目を覚ましたのは、その後、暫く時間が経った頃だった。彼は頭を右手で押さえながら、うめき声を小さくあげてゆっくりと起き上がった。

「いつつ…、一体何が…、あいつ、一体どうやって俺を寝かせたんだろう…？」

そう言つて、瑞樹は、鉄柵の方を見た。この公園は、夕日や日の出が凄く美しいと、近所ではちょっとした絶景スポットなのだ。

夕日は、丁度半分位沈んだところだ。寝かされた時から、差ほど時間が経っていないと思われた。多く見積もっても、七時半あたりだろう。

瑞樹は服に付いた土埃を両手で叩いて払うと、一度深呼吸をした後、来た道に戻り、家に帰った。

家の自分の部屋のドアを開けたまま、瑞樹は、固まっていた。

今、自分が置かれてる現状が、理解出来ずにいたのだ。

今、彼の部屋に、彼の目の前に、先程、彼を寝かせた、

「レ、レナード？」

そう、レナードが居たのだ。彼は「よう」と気さくに軽く手を上げて答えた。

「おかえり、瑞樹」

その言葉に、瑞樹は素早くドアを閉め、学生鞆を床に落とすと、テーブルの前に座っているレナードに勢いよく近づいた。そしてテーブルを挟むようにして立つと、

「何で…、お前がここに居るんだ、レナード！」

と、テーブルを両手でバンツ！と叩いて聞いた。

レナードは「まあまあ」と言いたげに、両手を前に出すと、理由を口にした。

「あの時のお前に説明したら、色々、面倒くさそうだったんだよ。一人で突っ走りそうだったからな」

レナードのこの言葉に、瑞樹は口ごもる。彼は普段は結構冷静だと自負していたが、今回は凶星だったらしい。レナードはそのまま続けた。

「だから、落ち着かせたかった。冷静になれよ。人間、いつだって『急がば回れ』だ」

「そんなのは、分かってる。で、さっき言ってた『決定的なもの』って何？」

瑞樹が公園で聞いた「問い」に答えるように急かすと、レナードは頷いて「俺も今、話そうかと思っていた」というと、自分の鞆、から帰ってくる時に買ったのか、ペットボトルのふたを開け、中身のお茶を飲んだ。中身が喉を通る音がする。

レナードはペットボトルのふたを閉めると、右手の甲で口の周りに付いたお茶を拭き、瑞樹の方に顔を向け、口を開いた。

「さっき公園で俺が、唯について言ったこと、憶えてるか？」

「あ、ああ。確か、唯の死因と、彼女が、死ぬ直前まで何をやらされていたか…だったよな？」

それを聞くと、レナードは、自身の鞆を膝の上に置いた。

一度、チャックを開き掛け、手を止めた。

「アイツは…唯は、自分の父親に、自らの幸せの為だけに、娘を売って、奴隷にしたのさ」

レナードは、一度口を止め、間を置いて言う。

「『殺し』のな」

瑞樹の体に、脳から手足の先まで、電撃を打たれたような衝撃が走った。

そして彼は、無意識か、手をテーブルに叩きつけて、叫んだ。

「そ、そんなことがあつてたまるか！

日本の法律で、許される筈が」

「ホレイシヨー！」

瑞樹が「ない」と言おうとしたのを、レナードも叫んで遮った。勿論、この場にホレイシヨーは居ない。レナードはまた少し間を置くと、口を開く。

「『ホレイシヨー、この天地のあいだには、人智の思いも及ばぬことが幾らもあるのだ（シェイクスピア【ハムレット】福田恒存訳「第一幕 第五場」）』…落ち着けよ、瑞樹。さつきも言っただろ」

「……ッ」

瑞樹は机に叩きつけたままの右手を、そのまま握りしめ、叩きつけた際の反動で立ちあがってしまった体を座らせた。右手は握りしめたままだったが、レナードは彼が座るのを確認すると、先程からチ

ヤックに手を掛けていた鞆から、一枚のDVDを取りだすと、瑞樹に表面を見せる様にして、持った。

「午後二十三時五十八分から……？もしかして……」

彼がそう言っていると、レナードは頷き、DVDレコーダーにDVDを読みこませ、再生ボタンを押した。

DVDが、あの日が、再生される。

時間は、半年前に遡る。

視点は、“彼ら”から“彼女”へ。

部屋語らい（後書き）

次回からは過去編・・・

つまり、死んでしまった高宮唯の話になります。

物凄いスピーディーに進んでますが、ここまでで実は、原稿用紙2枚半分のやつなんです・・・（・・）↑ 投稿用にあたって、見やすいように改行した分は除きます。

ちなみに唯編は、結構長くする心算です↑

そして、その後の現代編は更に長くする心算です↑

それでは by 霧・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3408ba/>

Crimson-Reason.

2012年1月9日01時58分発行